

令和6年度 白川郷学園研究構想

【学園の児童生徒の実態】

- ふるさと白川郷の自然やくらしに興味をもち、意欲的に活動に取り組むことができる。
- ICTを効果的に活用し、自分の考えを豊かに表現できる。
- △一人一人の学力に大きな差がある。
- △課題を見出し、解決方法を自己決定する意識が弱い。

【学園の教育目標】

ひとりだち

自立 共生 貢献

【今後求められるもの】

- ・ふるさと白川郷で培ってきた知識や技能を土台として、社会や人生をより豊かなものにしていく力。
- ・願いの実現や課題の解決に向かって、自分を見つめ、適した学び方を自己調整しながら、自らを向上させていく力。

【育てたい資質・能力】

「自己をみつめ、よく考え、主体的に行動する力」

【「ひとりだち」の児童生徒像】

- ① 自立（すすんで）…主体的に学び、より質の高いものを自ら求め続ける子
- ② 共生（なかよく）…対話的に学び、仲間と協力して活動する子
- ③ 貢献（みんなのために）…深く学び、仲間・地域のために行動する子

【研究主題】

学びのひとりだちを目指す授業の創造

【研究仮説】

「学びのひとりだち」とは、自分の願いの実現や課題の解決に向かって、失敗を恐れず挑戦し、学習を自己調整しながら粘り強く取り組むことで、向上していく姿である。

「できるようになりたい」「なぜ」「解決したい」などの願いや課題意識のもと、生活経験や既習内容から解決の見通しをもち、目標や課題、適切な学び方や方法を自己選択する。この学習過程を経て、「できるようになった」「わかった」「解決した」など自らの変容を実感し、それに至る学び方を自己評価することで、自分に適した学び方を自覚していく。

このような学習機会を生み出す授業を創造し、義務教育学校9年間の学び方の系統性の意識のもと継続指導すれば、子どもたちは「学びのひとりだち」を果たし、先の読めない社会においても、自分の力で学び、成長することで、よりよい未来を切り拓いていくことができる。

【研究内容】

○9年間の学び方の系統性のもと、学びのひとりだちを目指す授業の工夫

- (1) 明確なめあてや課題意識をもてる導入
- (2) 課題解決の具体的な見通しをもち、多様な学び方で試行錯誤できる展開
- (3) 自らの変容や学び方の自覚を促し、次の学びに生かす終末

※ (1)～(3)の手立てとして白川村の地域素材の活用

※ 研究の土台としての基礎学力の定着を図る「みがき」の時間の充実